

令和7年度第1回小諸市総合教育会議議事録（概要）

日時：令和8年2月10日（火）午後4時から

場所：小諸市役所3階 第1会議室

出席者：市長 小泉 俊博

教育長 山下 千鶴子

教育委員 田中 隆之

教育委員 小山 真紀

教育委員 塩川 侑佳

進行：柳澤総務部長

事務局：安藤教育次長、小林企画課長、吉澤学校教育課長、有賀文化財・生涯学習課長、佐藤スポーツ課長、依田人権政策課長、高橋学校教育係長、笹川教育総務係長、前田再編整備係長、高柳主幹指導主事、三井企画調整係長、企画調整係員

議事内容

1 開会

2 あいさつ

（小泉市長）

皆さんこんにちは、市長の小泉でございます。

平素は、小諸市の教育行政の推進に多大なご尽力をいただきまして誠にありがとうございます。また、本日は、小諸市総合教育会議を開催しましたところ、ご多用のところ、ご出席を賜り誠にありがとうございます。

さて、本市の基本計画の大きな柱の1つであります、子育て・教育につきましては、社会情勢の変化に囚われず、子どもたちが自ら課題を見つけ、自ら学び、考え、判断して行動できるよう生きる力を育むため、豊かな心と健やかな成長、また基礎学力の向上等に取り組み、その学びを支える教育環境の整備に向け、教育委員会と共に施策の推進を図っていくこととしております。

現在、小諸市が市内外の人々から選ばれ、持続可能な町であり続けるために、目指すべき姿、目指すべきビジョンとして、「健康都市小諸・小諸ウェルビーイング」を掲げ、各種施策を実施しているところでございます。これは、健康、福祉、子育て、教育、環境、産業、交流、生活基盤の行政経営などあらゆる分野において、健康・健全であること、また市民が健康で生きがいを持ち、安全・安心で豊かな人生を営めるよう、そういう町を目指すものでございます。その中で

も特に、人口減少における自然増への挑戦を掲げておりますが、自然増とするためには、若いファミリー層の世代に安心して子どもを産み育てていただくことや、教育の充実を図ることが重要となります。市内外の方々から、小諸が選ばれるまち、魅力があり、価値を生み出すまちであるためにはまずは教育が、健康であること。率直に意見を出し合う中で、市と教育委員会が、相互に役割・権限を尊重しつつ、本市の教育の将来像や課題を共有し効果的に教育行政を推進するために設置されているものでございます。本日は、「小諸市の目指す学校教育のあり方について」を議題とさせていただき、特に現在進めております「対話と協働の学び」について意見交換を行いたいと考えております。ぜひ皆様には忌憚のない、また積極的なご発言をお願いしまして、開会にあたってのご挨拶とさせていただきます。本日は、短い時間ではありますがよろしく願いいたします。

3 会議事項（進行：柳澤総務部長）

（1）「小諸市の目指す学校教育のあり方」について

（高柳主幹指導主事より、資料の「小諸市が進める対話と協働の学び」について、小諸市の目指す学校教育や、授業デザイン、「対話と協働の学び」の現状と課題について説明）

（柳澤総務部長）

本日は、非常に大きいテーマでありまして、小諸の目指す学校教育のあり方になっています。この中を小テーマ2つに絞って意見交換していただければと思っています。では、最初の小テーマですが、「小諸市小中一貫教育推進基本方針に基づく9年間を貫く授業デザインについて」です。資料を開いていただくと目指す子ども像について掲げられております。立つ方の自立と、共生と、律する方の自律。このことについて最初に話していただければと思います。それでは私の方で指名をいたします。では、火蓋をです、市長に切っていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

（小泉市長）

将来目指すべき子ども像ってということで、自立、共生、自律っていう話なのですが、そもそも今回の学校再編にあたって、以前から前教育長の小林秀夫先生と教育を行う過程で、ぜひとも小諸市の目指す、この市の子ども、これから子どもというか、学校で学ぶべき部分で一番強調したのがこの自立の部分です。ここには優しい言葉で書いてありますけど、やはり自分で考えて、選んで、決断して、結果について向き合える。IT化というか、ゲーム世代の子どもたちにすると、自分の頭で考えることができない子どもたちがたくさん増えて

きて、やはり「生きる力」を学校でぜひ身につけてもらいたいです。それを主眼にしたいというのは、小林先生とも話をしていたところです。

ここには他者との「共生」、違いの中で生きるっていうことがすごく大事ですし、そのことによって自分の良さも分かると思います。また「自律」という部分で言うと自分を律することも当然あると思いますけど、自分を律しながら学び続けるという姿勢も、この自律の中にはあるのかなという風に思います。自分自身というものも自分をまず基準に置いて、社会の中で他者との関わりを持っていく。その中で自分の位置づけ、自分の存在意義を考えながら、学びの中からそういうものを掴んでもらい、自分の頭で考え、自分の考えに従って行動する。そういう中で子どもたちが大人になっても、生きていける力を身につける、そんな社会になればいいな、そういう学びの場であって欲しいなという風に考えてきました。そういう意味では今回この対話と協働の学びの中で、こういう大きな目指す子ども像っていうのをちゃんと掲げていただいて、それを具現化していくために、先ほど高柳先生がお話ししていただいたような、いろいろなやり方をとって、やっていくという形の中がすごくありがたいですし、それがまた義務教育学校ということで1年生から9年生まで一貫して貫けるといっても、非常にありがたいことだと思っています。先ほども話があがりましたが、小諸市が抱えている教育の課題、学力のばらつきも、このやり方によって一体感が出てくるかと思っています。また、不登校の原因って多分いろいろあるとは思いますが、この対話と協働の学び、他者との関わりの中で、先ほどお伝えしたようなゲーム世代の子どもたちにすると、ゲームの中では自分1人だけで進められます。しかし、他者と関わるのが低学年からできることによって、不登校もある程度、解消できる部分もあるのではないかという風に思っています。いずれにしても、そういう課題も解決しながら、この目指す子ども像に近づいていってくれば良いという風に思います。ちょっとまとまらない話で恐縮なのですが、意見として述べさせていただきました。

(柳澤総務部長)

ありがとうございました。市長のお話の中で、「生きる力」というお話がありました。この生きる力の拠り所になってくるのが先ほど、市長もおっしゃっていた、立つ方の自立だったり、律する方の自律だったり、共生だったりとか、そういうことなのかなという風に思いました。

(田中委員)

自立という部分で言うと、資料の5ページのところにも目指す子ども像というところで「主体的に動き出せる子ども」という部分があるのですが、この主

体的というところが、すごく大切なのではないかという風を感じています。自ら学べるということはとても素晴らしいことで、それがこの対話と協働の学びによって、子どものうちから、通して学べることによってそういう力がついてくる。ひいてはそういう子どもたちが当然大人になるわけですから、その子どもたちが大人になった時にもその対話と協働によって世の中が動いていく。

大人の方は皆さん多分分かると思うのですが、いろんな場面でやはり、意見の違う方もそうですし、志を同じくする方ともそうですけど、対話を重ねて物事が進んでいくわけですから、非常に重要な要素だと思っています。私は、主体的に行動することによって、子どもの好奇心や関心も高まるし、それがひいては大人になっても、そういう関心が高まった状態で学ぶ意欲に繋がっていく。それが小諸市民にとって1人1人にとってとても幸せなことになるのではないかなという風を感じてます。

(小山委員)

私自身で言うと、自分の経験からしか分かることがないというか、話せるようなことがないのですが、自分自身の子どもは今、だいぶ大人になっています。もちろん一斉授業を受けて、学校に通ってきた世代なのですが、今、子どもたちを見ていて思うのは、小さい頃は健康であって欲しいとか、ちょっと欲を出して勉強を頑張って欲しいとか、そういう感じで、願いを持ってきたような気がします。それが大人になってきて見ていて思うのは、それこそ生きる力というか「幸せを感じる力」を身につけていてくれるとすごくいいと思います。幸せになるとかじゃなくて、ハードルが低くてもいいので「幸せを感じる力」をもった子になると、すごく本人が生きやすくなるのではないかっていうことを、実感しています。その中で、そういったことを身につける1つの方法として、市で9年間を通して、授業デザインとか、学校の中でどういう風に育っていくかっていうところを、考えていただいているところなのですが、やはりその1本筋の通ったぶれない教育デザインで9年間学べるっていうことは、すごく幸せなことだと思います。その中で、学校の先生方が、もう今すでに、対話と協働の学びを実現するために、授業作りをしてくださっています。学校の中で頑張ってくださいしていることが、保護者に伝わって、保護者も「こういう方向で学校は今、教育をしている」ということを、共有し合って、同じ方向を向くということ、意識していけるようになると、より良いのではないかと思います。ひいては、少し欲を出せば地域の方々にも分かっていたいただいて、そういった形で、みんな、学校とか先生方だけにお任せするのではなくて、自分たちの子どものことを「一緒に」という意識を保護者が持てるようにする。

そういった、保護者に対する意識づけとか働きかけを共有していくとかいうことも必要なのではないかと考えています。

(総務部長)

小山さんの中で、地域で支えるっていう、すごく大事なワードが出てきたなと思います。やはり、学校任せにしないというところだと思います。そういうことって、今中学校の部活の関係もありますけど、非常に、大切な視点だなという風に思いました。塩川委員はこの3つの子ども像について何を考えますか。

(塩川委員)

学校も家庭も目指す像、子どもに目指すところっていうのは、自立1つなんだなということ、今確認できたという感じ。生きてく力をしっかりつけてもらいたいですし、自分が幸せでいられる環境を選べる子どもになって欲しいというのも、私自身は、とても大事に思っています。自立できる子、自己肯定感がしっかりある子。そのためには、やはり自分のことちゃんと知っている子、自分の得意だったり不得意だったりもちゃんと分かっている子に、なってもらいたい。また失敗しても自分を問い直す力だったり、そこで方向転換だったり、自分で考えること、自分で考えて判断できる、自分でしっかり自分の生きる道を決めていかれる子になってもらいたいという風に思っています。ですので、今市が掲げている対話の学びの中でも、すごく自分の発見になると思います。他者との関わりもそうですし、対話もそうですし、もちろん、「あ、自分は違うな」という感覚も生まれるかもしれないですけど、それもそれですごく大事で、自分の持ち味として、自分の良さに気づける子になって欲しいという風に思っています。

(柳澤総務部長)

ありがとうございました。それでは山下教育長お願いします。

(山下教育長)

私はこの社会に出た子どもたちが、他者の声に耳を傾けて判断して、共に決定する習慣と能力が、1番必要だと思っています。この力を育てるのが教育だ、とも思っていますので、主体性、それから互いに理解できる、また私を発見していくという、この「自立・共生・自律」、この精神はどうしても欠くことができません。そして、それが実現する教室が今、生まれているということに、手応えを感じています。

少しだけ紹介いたしますと、先日、小諸の学習のあり方を考えるワークショッ

プというのが1月29日に千曲小学校で行われました。その方たちの声を少し紹介します。

実は、不登校とか、学力に伸び悩みを感じていた小諸市であります。先生方が子供たちの実態を一言で言っていました。授業が始まる前から「シャッターが下りている」という言葉です。私は非常にショックでした。まさに、「これから授業を始めます」という途端に、突っ伏してしまう子どもたちというのは、どのクラスにも何人かいました。そこからの出発でした。そうでない学校を作ろう、そうでない授業作りをしようというのが始まりでした。そしてこの対話と協働の学びが始まって1年と少しが経過していますが、どうでしょうという質問をしたところ、「寝ている子が少なくなった」と数学の先生が仰いました。「自分が、教室を回っていくと大体クラスに3人から5人ぐらい突っ伏してしまう子どもたちがいました。しかし今、そうではありません。安心感かな。」と、そんな、まとめをされていました。仲間が4人グループで学んでいる中で、誰かが何かを一言言ったりノートに記述したりするのを見ながら「それなら私もできるかもしれない」と。そんな気持ちをもっている子どもたちが出現している。発言も増えているとか、教え合いとか学び合いの経験というのが今、生きていると。そんな、感想が出ていました。ただ、突っ伏してたから頭を上げたけれど、対話じゃなくてまだ会話かなって、そんな、課題も残されています。対話に持っていくにはやはり、その1時間の中での課題が一番重要です。先生方はそこにメスを入れると、そんな方向であります。

(柳澤総務部長)

ありがとうございました。今、5人の皆様からお話にあった中でやはり、社会に出て、生きる力というのは、本当に大切だという風に、皆様おっしゃっていました。他者との関わりですとか、あるいは安心感、という話もありました。

発言された皆様のご意見に対して何かありますでしょうか。「これはいいね」とか「ちょっとここ聞いてみたい」とか、どうでしょうか。

(田中委員)

小山委員さんの方で、保護者の学校だけではなくて、要するに家庭ですよね。家庭での対話と協働の学びへの、要約すると、理解と実践というような、言葉かなとお聞きしたのですが、これが非常に重要なことだという風に感じました。というのは、子どもたちが学校と家庭で全く違うことをやっていたのでは、そもそも効果が薄れるということを感じました。やはり、それを達成するには何が大切だろうと考えると、やはり市民への周知がすごく大切になるのではないかと感じました。以上です。

(総務部長)

はい、ありがとうございました。周知ですね。他にはいかがですか。

(山下教育長)

お子さんを育てている皆さんで、生まれてから、ハイハイしたり歩き出したり、そんな時の子どもたちと、それから、今学童になって、今、私が言ったような「シャッターを下ろしている」という子どもたちも、成長するわけです。皆さんが最初に出会った時、ご自分の子どもさんは、どんな経験をして成長してくとこうなってしまうという、そこには、やはり私たち大人というか、教育の分野での課題があったのではないかと思うのですが、いかがでしょう。

(塩川委員)

私は今まさに子育て真最中です、小さい時の記憶ですが、当時子どもたちって好奇心でいっぱいでした。挑戦したい気持ち、気になることはすべて手を出したいし、口にも運びました。そういう姿が一体いつ無くなったのかと思うと、やはり「ダメだよ」と言いすぎたかなと。危険なものは遠ざける、先回りする、予知する、それが妨げだったかなと、今、すごく反省する部分もあります。子どもってもっと、自分で挑戦する力を生まれながらにもっていたはずで。それを、子どもを守るためにですが、ルールがあったり、学校だったら校則があったりとか、家庭だったら親の声がけだったり、決まりがあったり、そういうことが大きかったかなという風に思っています。

(田中委員)

まず、子どもを育てるということに対して、もっと夫婦でいろいろ話し合っ、いろいろ決まり事を作っていけないといけなかったかなと思って、最近自分が学んだ中ではいろいろ反省するところがあります。塩川さんがおっしゃったように一言で言うと、過干渉になりがちですよ。今の世の中がそういう風な風潮になっているような気がします。例えば、中学校の部活動も今、ちょうど移行期になりますが、それに対しても送迎が必ず発生します。それも、できるならやはり自分の徒歩で登下校はすべきだという風に思います。都合の中で、送迎をしなければいけないとか、そういう部分もそうだし、細かい部分で言えば、子どもに判断させればいいところを、塩川さんが仰ったように先回りしてしまっ、それを一言で言うのは難しいのですが、親として出すぎてしまっています。子どもの芽を摘んでいるというのは、今のところ、感じるころではあります。

(小山委員)

うちは上の子がものすごく、よく言うと活発なタイプの子で、もう目を離すとそこにはいない、小さい頃そういう感じでした。自分も若かったのもあり、どうしても、つい周りとの調和みたいなものを考えてしまいました。「迷惑をかけちゃいけないな」とか「先生に申し訳ないな」とか、特に幼稚園の頃です。それこそ、先ほど田中さんも「先回り」と仰ったように、こういうことをしたら、こうなるからやらない方がいいよとか、もしくは言葉で言わなくてもその行動を阻止するような先回り。それが良かれと思って、子どもに、あまり軋轢を生まないようなことを、今になると考えすぎたかもしれないなという風に、思います。今、小さいお子さんを見ると、すごく、自由気ままにやっていて、でもそれを見ても「あ、いいな」って思うだけなんですよね。それがなぜか自分の子どもってなると「ちゃんとしなきゃ、ちゃんとさせなきゃ」みたいな気持ちが出てきてしまいます。その中でやはり対話ってすごく大事だったと思っています。どうしてそんなことをしたのかっていう子どもの気持ちを、果たして聞いてきたかって言われると、子どもにはちゃんと子どもなりの思いがあったかもしれないのに、それをきちんと、聞く力が自分になかったし、それを子どもに話させてあげるような、場面というか環境というのを作ってあげるということに、思いを馳せることもできませんでした。それは反省と共に、これから先、こういう形で、世界全体で、対話の大事さ、協働の大事さというのが、クローズアップされて、それが当たり前のことになっていくっていうのは、すごく幸せなことだという風に、自分の反省も込めて今は思っています。

(柳澤総務部長)

ありがとうございました。それでは時間の関係もありますので、次の小テーマの方にいきたいと思います。既に、皆様の方から、対話と協働の学びということは、語られておりますけれども、今日はこの対話と協働の、学びをもう少し、深掘りをして「これって本当にいいの?」とか、あるいは「こういう課題があるのではないか」とか、その辺の議論を深められればという風に思っております。自由にお話いただければと思います。

(田中委員)

山下教育長が、対話と協働という風におっしゃいましたが、まず1年ほどでどのくらい、子どもたちの学力が上がったかということは興味があるところです。学校を何校も見させていただいても、まだまだ、授業にうまく取り組めていない教室もあつたりして、浸透するのになかなか時間がかかるという風に、思っているのが正直な感想の1つです。それと、年度末で先生もお別れしま

す。要するに異動があります。対話と協働の学びに対して深い理解を示している先生が、異動して行って、別の学校で、別の地で、力を発揮していただけるようになるのはとても素晴らしいことだと思います。しかし、また新しく入ってきた先生に対して、その対話の学びというのを1から伝えていかなければいけません。同じ課題に対して、先生たちが課題に向かっていかないといけないというのはなかなか大変だと思いますので、そこら辺が課題と思っています。

(柳澤総務部長)

ありがとうございました。いろいろな課題に対して、「こうやったら解決できるのではないか」等のお考えがもしあれば、出していただければと思います。では小山委員さん、お願いします。

(小山委員)

私も田中さんがおっしゃったようにいろいろな学校の授業風景を、見せていただいて「これがもしかしたら言われている対話と協働なのかな」という授業もあれば、「これは単なるグループでいるだけになっているのかな」とか素人ながら、なんとなく見ていて、その区別が分からないところもあります。なんとなくグループの形になっていて、子どもたちが、それぞれ話していればそれは対話と協働の学びなのかって言われると、パッと見たところだけだと、実際分からないところもあります。おしゃべりが悪いわけではないですが、おしゃべりになっているところもあります。それも1つの対話の始まりということだと思います。そこを、限られた授業時間の中で対話をしながら、学ぶべきことも学ぶ。基礎の課題と、ジャンプの課題っていうんですかね。すごく盛りだくさんなので、先生方はすごく大変です。その中で先生方同士の対話と、学び合いというのが、盛んに行われ始めているようなので、ここがすごくいいなと思っています。その授業だけでなく先生方も1人じゃなくてチームとして、自分たちの、授業のレベルアップという言葉が適切か分からないですけども、もっと子どもたちにとって良い対話と協働の学びというものを、与えてくださる立場になるという意味ではすごく大事なことだと思います。

(柳澤総務部長)

ありがとうございました。先日、小学校でワークショップを先生方がやられていました。私は時間の都合で、初めしか見れなかったのですが、すごく盛り上がっていたという話を、後から聞きました。教育長さん、どんな感じでしたでしょうか。

(山下教育長)

どのグループも、実際に対話をしている先生たちの集まりでした。良さがあ
り、また課題もありました。その先生たちが手応えとして思うものは、やはり
先ほど言った「何でも話せるね」という安心感と言いますか。それから今ま
で、視線が合わせられなかった子どもたちも、だんだん合わせられるようにな
ってきたとか。心の解放と言うことでしょうか。4人グループという環境が本
当に大事なんだと思いました。授業を解放するってこういうことかなと。みんな
に「分かった？」って言えば、大体分かったって言って頷いたりしますが、
本当は分かってないのかもしれない。「分かった」の中身だって、みんな違
います。それを一色端にして私も、現職の時は授業を進めていたなと感じまし
た。だけど今そうじゃないということ、先生方が肌で感じ始めています。そ
れから子どもたちの先ほどの笑顔です。あれが今、本当にゴールとして求めて
いる対話と協働の学びかと言われると、内容まで吟味しなければいけないわけ
ですけど。少なくとも子どもたちの表情は違ってきました。これだけは先生
方も身に染みて感じています。ただもう一方で、それぞれの教科の目標とこの
対話の学びが、どこで、何をもちってその教科の目標が達成できたかっていうと
ころも吟味しなければいけません。手応えはいいけれど、本当にこれが目指す
子供の姿なのかって、まだ到達していないことは確かです。

(塩川委員)

私も、とても身近に子どもたちの学校だったり、担当した学校だったり、今
年は、芦原地区も東中学区も両方とも見学させていただいたり、訪問させてい
ただいた中で、そこに向かって今、先生たちが一生懸命なんだという姿、ジャン
プの課題が用意されていたり、なんとかそこに持っていこうとされている先
生の姿がありました。私の知っている、私の生きてきた時代のその学校教育と
あまり、違いが分からないなっていうようなところもありますけれども、対
話・協働の学びの一番いいところだと思います。子どもたちの学力的にもそう
ですけど、記憶にすごく残りやすいのではないかと思います。対話をすること
で、友達とより深く、追求したことが記憶に残ります。それがまた知識となっ
て残っていくっていうのがすごく魅力的だなという風に、子どもを見て思っ
ています。

子どもに、印象に残った学校の授業だったり、課題だったりっていうのを聞
いてみたら、それってやはり対話と協働の学びをやってきたんだという答えが
返ってきました。2年生ところで、30センチものさしが配られて「何を測っ
てもいいよ」と言われたそうです。次の授業がたまたま国語の、タンポポの知恵
だったみたいです。そしたら1人の子がいろいろ測ったんですけど、タンポポ

の茎を測って。それが子ども同士で競争になりました。それが算数から始まりましたが、国語になって、国語だったんだけど「それってどこに生えてたの？日向だったのか日陰だったのか。」みたいにすごく深まって、最終的に、学校探検みたいな感じで外にまで飛び出していったってような授業があったそうです。国語の「ちいちゃんのかげおくり」だったり、そういうものが、どんどん国語の中だけで終わらずに道徳だったりとか、社会にまで発展していくような、枠を取り払って、どんどん子どもたちが追求していくような授業は、子どもの記憶に残っています。しっかりと、それが知識となって、その時の、課題じゃなくても、後々中学に行った時とかに、「あ、ここよく学んできた」とか「ここ知ってる」とか「もっと知りたい」という風な、きっかけにもなるのかなと、子どもを見ていて感じています。

(山下教育長)

もっとも大きな課題はですね、私自身の中にもありますが、この、対話と協働の学びは、授業作りの中で、今言ったように「分からない」を仲間と共に「分かって」いくことです。そういう意味で、子どもたちの意欲を喚起できる授業作りであるということが分かりました。この手応えもあります。だけど、それを実現させていくのは大人（教師）です。教師は、一体その権威主義から、自分が権威主義だったとか、子どもを本当に信頼しているかとか、そういう部分を見返しているかというところが一番大事だと強く思うようになりました。やはり「教えてやるんだ」と、今まで考えていた先生たちが「いや、子どもと同じ平場で、フラットなところで一緒に考え合おうんだよ」ということがその授業だけではなくて、日々の生活の中でも本当にできているのでしょうか。そこをもう一歩、先生たちと共に自分自身を振り返ることが必要です。例えば、自分はどんな、差別意識があるとかないとか。権威主義か、そうでないかとか。子どもを本当に信頼しているのか、信頼していないのかとか。自分の欲望のままに大人だからってこう、押し付けていないかとか。生徒指導はまさにそうだと思います。そこら辺にメスを入れないと本物にはなっていないと思います。それは先ほど皆さん、保護者として話されたように、子どもが考えるすべ、考える時間もないうちに私たちが決めて「こうでしょ。ああでしょ。ダメでしょ」とか。この前、ある先生の講義を聞いた時に思いましたが、私もやってしまいますが、ブランコ1つとっても、遊んでいる時に列を作っていたら、私が行って「順番こね」と言います。「何分、何回乗ったら降りようね」なんて決めてしまっていた気がします。それが、教員としての私の仕事だと思っていました。そうじゃないんですよね。そこら辺に気づいていくことと、さっきも言ったように、自分の、心の中に、本当に上下関係のような、「子ども

は教えてやるものだ」みたいな、「指導するものだ」みたいな思いが、もしあったら成功しないとそんな風に思っています。

(柳澤総務部長)

ありがとうございました。それでは市長お願いします。

(小泉市長)

今、山下先生が、おっしゃっていただいたこと、すごく重要だとは思いますが、ただ、どこまでそれでいけるのかなっていう、正直、正解がよく分からない部分があります。なんでかと言うと、結局、学校においては先生方、それから家庭においては親、社会においては大人たちが、今までみんな一律の学校運営の仕方へは、一方通行の授業を受けてきましたから。また、管理社会の中で、早く一定の方向へ向かうことが求められた中で、何十年と生きてきた我々なんですよ。その中で、では本当の子どもたちが、発想すること、自分たちが作るルールだけで本当にいいのかどうなのかっていうのも、よく分からない。それが、権威主義なのかもしれないけど、大人として、例えば、社会のルールというのは、野放図にするのではなくて、ここまでは最低、ルールとして覚えていってねっていうことを、大人として、押し付けるっていうことは、ちょっと適切かどうかよく分からないのですが、あった方がいいのかなっていうのも一方であります。でも、子どもたちの、自主性とか、今まで出ていたように、想像力とか、発想力とか、いろいろな力を身につけて、深掘りをしていくためには、大人が介入をなるべくしないで自分たちで、考えさせるっていうことをした方が、いいと思います。自由なのかバランスなのか、そこら辺がよく分からないことが、1つ大きな課題だと思います。そういう中で、まずは学校においては先生方も多分そこら辺は手探りの中で、対話と協働の学びをされ、推進されている先生方も、自己矛盾までいかないかもしれないけど、課題に対してどうやってアプローチしていけばその理想の教育になるのかどうなのか、自分も一緒に、成長しながらというところを、多分悩まれると思います。それからもっと言えば、家庭の方は全くこの、対話と協働の学びっていうか、今まで我々が受けてきた教育とは180度変わってしまう中で、どこまで理解をして、ある意味子どもや学校を信じて預けてくれるのかなっていう、そこも正直分からないですよ。ただ、少なくとも言えることは、本当にその対話と協働の学びというのも、多分ゴールはないと思います。やることによって、やはりそのやり方の度合いによって深まり方がまた違ってくるっていう部分だと思います。じゃあ100を目指していくけど100ってどこ？っていうゴールが多分ないままやっていく中で、さっきのバランスっていうものが出てきたりとかすると

思います。そういう中で、確実に言えることは、対話と協働という学びを使うことによって、今までの一方通行の授業から、ただ知識を覚えるだけではなくて、自分でそこを深掘りできたりとか、自分の頭を使って考えることによって、子どもの育ちの中で、明らかな変化というのが出てくるんだろうなっていうところに大いに期待をしていきたいと思います。だから小諸がもう既にそういう授業を取り入れている中で、明らかな変化というのが、数年かけて出てくると思います。そのことによって子どもたち自身が自己肯定感であったり、自信をつけたり、それからまた物事深く捉えたり、自分で考えたことに対しては自分で責任を持つ、人のせいにしちゃダメなんだということも学んでいただいたりとか。いろんなことをその中から吸収とか掴んでもらえれば、100にならなくても成功なのかなと思います。すごく答えが出ない、問いかけに対しての答えなので、答えにならないのですが、そんな感じだと思います。

(田中委員)

この対話の学びは、今、市長さんも仰ったように、道半ばであることだけは間違いないのですが、それを進めようとしている我々が「ぶれないこと」、教育委員会がぶれないことっていうことがすごく大切だなという風に感じています。引き続きよろしくお願ひしたいと思っています。

(2) その他

【議題無し】

4 閉会

以上